

未来をつくる

（はじめに）



TOKYO ● 2020

（1964年東京オリンピック）

第二次世界大戦敗戦からの戦後復興を目指していた日本は、1964年に「東京オリンピック」を開催いたしました。多くの選手たちの活躍は国民に勇気と元気を与え、その後の日本復興への原動力の一端を担ったのです。東洋の魔女と言われた女子バレーボール、マラソンの円谷選手、柔道の猪熊選手、ウエイトリフティングの三宅選手ら、多くの選手が活躍をいたしました。

その中においても、「体操ニッポン」の活躍は一際輝いていました。金メダルは男子団体を皮切りに、遠藤選手の個人総合と平行棒、早田選手のつり輪、山下選手の跳馬、銀メダルは鶴見選手の個人総合、あん馬、平行棒、遠藤選手のゆか、そして女子体操団体での銅メダルと、金メダル5個、銀メダル4個、銅メダル1個の合計10個のメダルを獲得し、「体操王国ニッポン」の称号を得たのです。また、「東京オリンピック」で日本の参加全種目が獲得した金メダル16個、メダル総数29個のうち約三分の一を体操が獲得し、「体操ニッポン」は多くの国民に勇気と希望を与えるという使命を達成できたのです。

1964年の「東京オリンピック」から半世紀、現在の日本は右肩上がりの経済成長も終焉し、「平成不況」、「世界金融不況」の苦難が続き、成長著しい新興国の勢いと比較し閉塞感漂う日本へと変貌してしまいました。

それは戦後、「1964東京オリンピック」開催が決定する前の先行きが見えない「なべ底不況」と言われた日本の当時の状況と酷似しています。

今、日本は「1964東京オリンピック」開催をきっかけとした復興への道を再現しようとしています。その中で「体操ニッポン」に担わされた課題は、やはり「1964 東京オリンピック」での「体操ニッポン」活躍の再現、またはそれ以上の活躍が期待をされているのです。

「2020東京オリンピック」での「体操ニッポン」の活躍は、日本国家の使命と心し、取り組まなければならないのです。

（2013年世界選手権からの課題と目標）

昨年、本協会は「2012ロンドン・オリンピック」での反省を踏まえ、「これまでの延長線上に未来はない」との信念のもと「2016リオデジャネイロ・オリンピック」という新しい目標に向かってスタートをいたしました。

男子体操においては、2004年の「アテネオリンピック」にて、団体で金メダルを獲得した以降、8年間にわたり団体の王座を中国に譲り続けています。今や団体金メダルは「体操ニッポン」の悲願となってしまいました。団体王座奪還のためにも種目別スペシャリスト養成を緊急課題とし、「2013世界選手権アントワープ大会」では、個人総合・金メダル、そして種目別での複数メダル獲得を目

標と致しました。



結果は、「個人総合」で内村航平選手が世界選手権4連覇の偉業とともに金メダルを獲得し、加藤凌平選手も銀メダル。そして、「種目別」でも、ゆかで17歳の白井健三選手が金メダル、内村選手が銅メダル、あん馬では亀山耕平選手が金メダル、平行棒で内村選手が金メダル、鉄棒で内村選手が銅メダルを獲得し、金メダル4個、銀メダル1個、銅メダル2個の合計7個のメダルを獲得し目標を達成いたしました。

久しぶりのメダル量産は体操関係者ばかりでなく多くの国民の皆様感動を与えました。

今年の世界選手権はライバル国の中国・南寧市で開催され、アウェーでの戦いとなります。「2008北京オリンピック」では中国男子体操チームは8個の金メダルのうち7個を獲得しました。今年の大でも中国は同等の高い目標を持って臨んでくるものと予想されます。しかし、「体操ニッポン」の誇りにかけて、臆することなく、団体・金メダル、個人総合・金メダル、種目別の複数メダル獲得を目標といたします。

「2020東京オリンピック」では、国民の皆様からは「1964東京オリンピック」での活躍の再現、「2008北京オリンピック」での開催国中国の活躍と同等の活躍を期待されます。どこまで忘えられるかが課題です。これまでの個人総合選手強化に加え、種目別スペシャリストの育成強化が急務です。勇気を持って変革に挑戦し結果を出して参りたいと存じます。



女子体操においては、オリンピック、北京大会（5位）、ロンドン大会（8位）と常時、入賞国としての定位置を確保しつつあります。

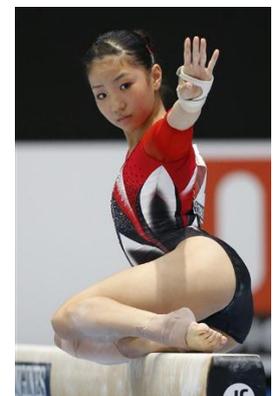
「2016リオデジャネイロ・オリンピック」では団体での銅メダル獲得を目標とし、そのために日本チームの弱点である基礎体力、芸術性の向上に取り組み、「跳馬」と「ゆか」の強化を徹底的に行い、「2013世界選手権アントワープ大会」での個人総合、種目別入賞を目標としました。

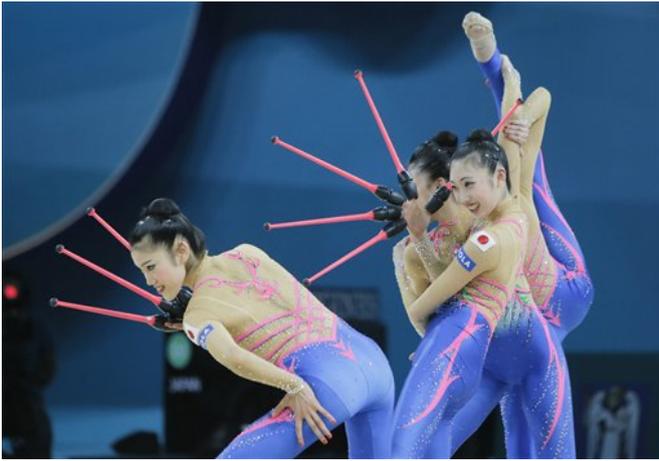
結果は、個人総合は寺本明日香選手が9位でしたが、種目別ゆかで村上茉愛選手が4位に入賞を果た

しました。

今年の世界選手権から「2016リオデジャネイロ・オリンピック」への出場権を賭けた予選となります。女子団体のオリンピック出場権争いは熾烈となっています。一步の着地ミスがオリンピックへの出場権を逃すこととなる激戦です。

今年の世界選手権での目標は、団体8位入賞、個人総合8位入賞、種目別8位入賞をといたします。女子は4種目ですので、団体入賞さらにはメダル争いへの生き残りを目指すには、男子以上に種目別強化への特化が必然となります。現在の強化選手に加え、種目別スペシャリストのタレント発掘と育成強化を推進して参ります。





新体操においては強化拠点をロシアに移し、国内基準の強化から世界基準の強化にシフトしたことで、「2012ロンドン・オリンピック」では団体が12年ぶりに入賞を果たすという実績を残すことができました。「2016リオデジャネイロ・オリンピック」でのメダル獲得を目標に、引き続き世界王国ロシアでの海外強化を継続して参ります。

「2013世界選手権キエフ大会」では団体8位入賞に加え、個人選手も強化し15位以内を目標としました。結果は、団体においては総合8位

入賞、種目別・ボール&リボン7位、クラブ8位を果たしましたが、個人総合は皆川夏穂選手の36位が最高で予選通過を果たせませんでした。

しかしながら、本年3月に開催されましたモスクワグランプリでは、団体4位入賞に加え、個人総合でも皆川選手が個人総合9位、種目別7位入賞を果たし、ロシアでの育成強化の効果を実績として残し始めています。

本年の世界選手権での目標は団体5位入賞、個人総合10位、国別対抗8位入賞を目標といたします。「2020東京オリンピック」に向けては、ターゲット世代の早期よりのタレント発掘、育成強化が重要であり、地域と連動した強化活動を推進して参ります。

トランポリンにおいては昨年度より本協会の正式種目となり、他種目とのシナジー効果を得て「2016リオデジャネイロ・オリンピック」では男子は金メダル、女子は5位入賞を目標とします。

昨年の「2013世界選手権・ソフィア大会」では、男子は個人、シンクロ、団体の全てにおいてメダル獲得を目標としました。結果は、男子ではシンクロ・上山容弘、山口 学組が金メダルを獲得したものの、団体4位、個人・上山選手4位と、あと一步のところまでメダル獲得は達成できませんでした。女子は団体最下位の13位、個人でも岸 彩乃選手が準決勝20位で決勝に進出できませんでした。



この結果を厳しく受け止め、強化の徹底的な見直しを図ります。これまでは日本のトランポリンが世界基準として受け止められてい

ましたが、現状は中国、ロシアに抜かれ、日本基準は世界基準より遅れをとっているのが現実です。この現実を真摯に受け止め、中国、ロシアに真摯に学ぶ体制に変革して参ります。具体的には近年急速に実力を伸ばしているロシアトランポリン協会との友好関係深め、定期的に合宿やコーチ招聘により国際基準に合致した強化を推進して参ります。

また、世界選手権への派遣標準得点を設定します。特に女子においては、派遣標準得点に達しない選手は派遣を見送るなど厳しい姿勢をもって戦って参ります。体操マルチサポートの協力も得て、体操で活用している映像分析の技術など科学的な練習方法も導入をはかって参ります。ありとあらゆる、考える全ての努力を実施し、メダル獲得に向かって強化を推進いたします。

今年の世界選手権での目標は、男子は個人・金メダル、シンクロ・金メダル、女子は24位以内に3名入ることとシンクロ決勝進出といたします。

「2014冬季ソチオリンピック」では、日本代表選手たちが多くの感動を日本もたらしました。ベテラン選手の活躍、若い選手の台頭、いかにベテランと若手の組み合わせが重要であることを証明してくれました。

国民の皆様は「強い体操ニッポン」を期待しています。「強い体操ニッポン」は必ずや「強い日本」への変革の原動力となります。東日本大震災の復興に邁進している人たちの心の支えにもなります。

そんな「強い体操ニッポン」の未来をつくるのは、他の誰でもありません。選手、コーチ、そして私たち体操関係者です。全国の体操関係者が一丸となり、「2020東京オリンピック」での「強い体操ニッポン」をつくろうではありませんか。

(一般体操)

「2020東京オリンピック」開催が決定し、国民の間でスポーツに対する意識が高まっていく中で、一般体操が社会で果たす役割は更に大きくなります。体操だけでなく全てのスポーツの底辺拡大、タレント発掘にも一般体操は貢献している分野だと存じます。



参加して楽しむ「日本体操祭」、観て楽しむ「スペシャルイベント」、そして今後は「チャンピオンスポーツの礎となる一般体操」に、さらにイノベーションをして参りたいと存じます。



また、各地域協会におかれましては一般体操の啓蒙、組織化に対し多大なるご尽力を賜り、順調に地域の組織化が進んでおりますことに感謝を申し上げます。各地域での「一般体操の組織化」、「一般体操指導者の育成」、そして「地域体操祭」の開催は地域体操界発展のみに限らず、新しいコミュニティの創造によりスポーツを通じた地域の活性化に寄与していくことと存じます。

一般体操を通じて、広く国民の皆様にご体操に興味を持っていただき、体操を通じて心身ともに健康を維持できるような社会、明るい未来を創出し社会に貢献をして参りたいと存じます。

(男子新体操)

昨年、男子新体操はデザイナー三宅一生氏と異業種のコラボレーションによるショーを開催し様々な分野の関係者から絶賛されました。また、本年2月の国際体操連盟理事会でも男子新体操を議題として取り上げ、男子新体操の今後について議論を展開いたしました。

男子新体操(団体タンブリング)はショーとしては誰もが素晴らしいと認めるところです。しかし、国際体操連盟が取り組む競技スポーツとして成り得るかという議論には残念ながら発展しません。以前より課題となっていますスポーツアクロへの編入についても議論されましたが、スポーツアクロ技術委員長は現状の競技形式のままの編入は難しく、男子新体操がスポーツアクロへ編入するためには競技形式の変更を強く示唆しています。



また、一方では一般体操委員長からは現状の形式が素晴らしいのだから敢えて変化を求めずに、日本固有のスポーツとして世界体操祭でショーとして継続したほうが良いとの意見もありました。

今後、こういった方向性をもって進んでいくのか決断しなければならない時期となっています。

いたずらに時を費やしては、今を頑張っている選手たちに未来が見えません。

選手たちの未来をつくるのは自分たちであることを認識し、今後の方向性について男子新体操関係者の皆さんで意見をまとめる時期となっています。

(2020東京オリンピックと地域活性化)

「1964東京オリンピック」は日本を大きく変えました。地域のスポーツ界にも大きな変化をもたらしました。東京オリンピックのコーチや選手だった人々が、オリンピックの翌年から始めた水泳、体操などを中心とするスポーツのクラブ（スクール、教室）は、たちまち全国に波及し、幼児から家庭の主婦、中高年まで、幅広い人々がスポーツに参加するようになりました。オリンピック開催の真の意義は、大会後にどのようなものを残すことができるかともいえます。

「2020東京オリンピック」は日本全国で体操が発展する今世紀最大のチャンスです。そのチャンスを確実なものにするためには、今から環境を整えておかねばなりません。

「2011世界選手権・東京大会」の開催時にも同じことを唱え、地域によっては「2011世界選手権・東京大会」後に体操愛好者人口を増加しましたが、全国的には飛躍したという実感を得るまでには至りませんでした。2020年は確実に飛躍しなければなりません。

「2014冬季ソチオリンピック」でも多くの選手たちが、その競技の基本として体操に取り組んでいることが紹介されました。私たちは体操（体操競技、新体操、トランポリン）が「全てのスポーツの基本」だと確信しています。それであれば、全国の全てのこどもたちに体操を体験させるような、そんな未来をつくろうではありませんか。

「1964東京オリンピック」後に全国に普及された水泳教室は、現代では水泳教室に行かないこどもはいないという状況にまでに発展をいたしました。同じことを体操でも実現しようではありませんか。

本年度より全国代表者会議にて「体操クラブ経営セミナー」を開催いたします。体操が水泳のように発展しなかった要因のひとつに、「体操クラブ」の中でチャンピオンスポーツへのこだわりがあったのではないのでしょうか。高価な体操器具をそろえ高度な技術を教えるのが目標となっていたことが発展を阻害しているのです。

社会が求めている「体操クラブ」とは、どのようなものなのでしょうか。保護者はこどもたちが宙返りをできるようにすることを求めているのでしょうか。水泳教室でバタフライが泳げるようになることを目標に水泳教室に通わせる保護者はいません。保護者たちは海や川で溺れないために、最低限の泳ぐ技術を身につけさせたくて水泳教室に通わせるのです。

今のこどもたちは転び方がわからず、転んだら顔面で受けてしまうそうです。そんなこどもたちに転び方を教え、礼儀正しく健康で元気よく育つことを教えることが「体操クラブのあるべき姿」で、「社会に貢献する体操クラブ」なのです。

私たちはこどもたちに宙返りや車輪を押し付けていなかったのでしょうか。顧客が必要と思うものを与えず、体操関係者の価値観の押し売りをしていたのかも知れません。いま一度、原点に戻る必要があります。「体操クラブ経営セミナー」では、国民の皆様のニーズをリサーチし、国民の皆様から「必要とされる体操クラブ」のあり方、経営手法を全国に伝達し、「2020東京オリンピック」後に予想される体操ブームに対応できるように、全国に一つでも多くの体操クラブをつくり、未来に対応して参ります。

また、「2020東京オリンピック」日本代表選手は、現段階では地域で練習に励んでいる選手から選出される可能性も大きく残されています。本協会・強化本部はこのことを重要視しなければなりません。強化本部と地域が一体となって「2020東京オリンピック」での目標を達成する。そのような強化策が必要です。

本協会では「体操発展の可能性」＝「国民の関心」×「チャンピオン」×「地域での普及活動」という方程式を用いています。「地域での普及活動」の数値が大きくなれば「体操発展の可能性」は大きくなります。



全国に先駆けて、大阪体操協会が「目指せ！2020東京オリンピック新体操強化選手」と題し、大阪体操協会と新体操強化本部との共働作業で「2020東京オリンピック」を目指す選手の発掘育成に取り組み始めました。このような試みは、男女体操、新体操、トランポリンの全種目において、全国に水平展開し、強化本部と地域とが一体となって「2020東京オリンピック」を目指すというスキームを作らなければなりません。

各強化本部下にブロック強化担当を配置し、強化本部と地域委員会との共働作業を推進して参ります。



「2020東京オリンピック」でメダルを獲得しても地域が疲弊していたのでは、その後の発展につながりません。2020年までに、「メダリストの活躍」→「地域の発展」→「メダリストの活躍」という好循環システムを構築し、全国規模の明るい未来をつくろうではありませんか。

これからの6年間、厳しいトレーニングを積んで勝負をするのは選手だけではありません。私たち全国の体操関係者も選手以上に努力し、選手と共に明るい未来をつくろうではありませんか。

（世界へ貢献する「体操ニッポン・マスターズクラブ」）

政府はスポーツ支援を通じ世界に貢献する計画「スポーツ・フォー・トゥモロー」を打ち出し、「2020東京オリンピック」に向け官民連携で途上国へのスポーツ支援を展開するための組織を立ち上げます。日本のスポーツ指導者を各国に派遣し、各国の日本での研修・合宿を受入れ、また各国で不足するスポーツ用品の援助を行う予定です。

「体操ニッポン」も本施策の則り、体操を通じ世界のスポーツの発展に貢献して参ります。

既に、スリランカ、シンガポール、フィリピンへはコーチを派遣していますが、今後はASEAN10をはじめ、さらに多くの国へ指導者を派遣して参ります。世界のスポーツ界の発展に貢献することも「体操ニッポン」の使命だと存じております。

そのためには人材が必要です。「体操ニッポン・マイスターズクラブ」を発足いたします。

「体操ニッポン・マスターズクラブ」とは、全国の体操関係者の中から海外に興味があり、体操後進国をはじめ他国の体操を自分の力で開発していこうというチャレンジ精神に富んだコーチたちを登録し、指導者を海外に派遣する本協会部門です。

「体操ニッポン・マスターズクラブ」では、海外に目を向ける若い指導者の育成とともに、学校



やクラブを退職されたシニアコーチたちを研修の後、海外に派遣をいたします。若いうちに世界を
観てみたい指導者や、現役の指導者として続けたい指導者たちに夢を持っていただき、世界体操界
の未来の創造に貢献して参りたいと存じます。

(指導における暴力、パワハラ、セクハラ撲滅運動)

柔道の暴力指導が明るみになった際に、本協会は他競技
団体に先立ち、直ちに「指導における暴力、パワハラ、セ
クハラ撲滅運動」に取り組み始めました。

「第三者機関による被害相談窓口」を設け、2014年2月
末日現在で6件の事象を取り上げ、5件の処分を執行いたし
ました。

私たちは、これまで表面化しなかった問題をディスクロ
ーズし解決して参ります。指導者の暴力、パワハラやセク
ハラによって子どもたちの心身の発達に支障を生じさせ、
尊い命が絶たれるといったようなことは、日本体操界で発
生してはなりません。

もとより、体罰は法律により禁止されており、本協会はス
ポーツ界の先頭に立ち、暴力、パワハラそしてセクハラの
撲滅を推進して参ります。

本協会としては、三つの基本方針により撲滅を推進いた
します。

第一として「指導における暴力、パワハラ、セクハラが発生しない環境づくり」を目指します。
都道府県体操協会を通じて機会のあるごとに、体操がスポーツ界に率先して「指導における暴力、
パワハラ、セクハラ撲滅」に取り組んでいることを告知していただきます。
地域委員会を中心に、クラブや学校だけでなく地域全体で監視・教育していくシステムを構築して
参りたいと存じます。



第二に「指導における暴力を無くす指導方法マニュアルの
策定」です。根性論のトレーニングではなく、科学的裏付け
の選手への説明と理解に基づく指導の実施や、選手が主体的
に自立して取り組む力の育成など、暴力に頼らない指導方法
を教育していくシステムをコーチ育成委員会にて策定し指
導者教育を徹底して参ります。

第三に「罰則規定の強化」です。既に、総務委員会にて倫
理規定の中に「体操界からの永久追放」を追加いたしました。
「これくらいいいだろう」という思いを徹底的に無くしてい
かなければならないと存じます。

かつて飲酒運転も「これくらいいいだろう」という気持ちか
ら重篤な事故が頻発し、厳しい罰則強化とともに今では飲酒
運転は激減をしています。残念ですが「厳しい罰則」無くし
て撲滅は難しいのが現実です。「厳しい罰則」をもって取り
組んで参ります。

「指導における暴力、パワハラ、セクハラ」が完全に撲滅されるまで、また撲滅後も本協会は厳しい姿勢をもって取り組み続けます。「指導における暴力、パワハラ、セクハラは存在するだろう」という今の認識を、「指導における暴力、パワハラ、セクハラは存在しないことがあたりまえ」の未来をつくって参ります。

(むすび)

「2020東京オリンピック」開催が決定し、日本のスポーツ界は大きく変わろうとしています。国内のスポーツ事情、世界での日本の位置づけ、全てがこれまでの延長線上ではなくなってきました。しっかりと羅針盤を見据え、私たちは「進むべき道」を歩んでいかなければなりません。私たちが「進むべき道」とは、新しい価値観をもって積極的に変化に挑戦し、社会に貢献し続けること。「体操ニッポンの誇り」を持つことです。

2020年は待っていても訪れますが、私たちの手によってつくる2020年でなければなりません。そういった意気込みを込め、今年のスローガンを「未来をつくる」と致したいと存じます。

以上、平成26年度（公財）日本体操協会政策方針です。皆さん、一緒に頑張りましょう。